



数日前、地球研とは同じ人間文化研究機構の姉妹研究機関である国立歴史民俗博物館（歴博）を千葉県佐倉市に訪ねました。表敬も兼ねて、企画展示「1968年—無数の問いの噴出の時代」をぜひ見たいと思っていたからです。1968年、私は大学の3回生（年生）でした。東大で登録医制度に反対した医学部学生の大量処分に端を発する学生達の闘争は、あっという間に全国の大学に拡大し、既存の学問と大学のあり方まで批判する「全共闘運動」になり、多くの大学は学生ストライキで休校状態になりました。大学の外では、ベトナム戦争に反対する市民グループ「ベ平連」の活動や、新東京国際（成田）空港建設に反対する地元農民を中心とする「三里塚闘争」、水俣や新潟などでの反公害運動も活発化していました。もともとノンポリだった私も、まわりの友人たちの真摯な議論や活動に刺激され、何かせねば、と思い始めていた頃でした。

そのような1968年を中心とする学生や社会の闘争・運動の資料を集めた展示ということで、私は突き動かされる気持ちで歴博を訪ねました。当時のガリ版刷りのアジビラや雑誌・新聞記事、報道写真など、あまり広くない会場にぎっしり展示されていました。会場には、私と同世代で何やらワケありげなおじ（い）さん連中が結構たくさん来ており、資料を食い入るように見ていました。当時、当たり前のように手にして読んでいたアジビラやミニコミ記事などが、「歴史資料」として陳列されていることに、違和感のような気持ちと、そのような時代だったのかという感慨が交錯しながら会場内を行き来しました。50年の歳月は、あの時代を陳列すべき現代史の一場面にしてしまったようです。（歴博には、今回の企画展以外に、古代から現代にいたる日本の歴史に関する広範で興味深い資料がたくさん常設展示されています。これについては、もう一度ゆっくり見学してから改めて紹介したい気持ちです。）

さて、1968年は、実は私にとって、もうひとつの新たな出発点ともなる記念すべき年でした。私は京大で、はじめは山岳部員としてその後探検部員として、1回生の頃から、南米チリ・パタゴニアの氷河地帯の「学術調査探検」を画策し、3回生の後半でようやく出発にこぎつけました。学内外の騒然とした空気の中、やや複雑な思いで深まりゆく秋の日本を後にしました。

南米・パタゴニアの数か月は自然も人もすばらしく、私なりの「探検」を満喫して、半年後に帰国しました(注1)。しかし、全学が封鎖されたままの京大で再会した部の仲間の雰囲気はすっかり変わっていました。「あんたらのやってきた『帝国主義的探検』はどう総括するのか？」というのが、仲間からの鋭い質問でした。仲間との激しい議論は毎日のように続きました。その頃、探検部創設者でもあった本多勝一氏（当時朝日新聞記者）は、ベトナム戦争の取材などの経験も踏まえて「探検される側の論理」という本も出版され、私たちは本多さんと対話する機会も持ちました。

「探検」は、広い意味で、西欧の近代科学の落とし子です。京大探検部はだからこそ、「探検～学術調査」と位置付けていました。私は高校生の頃から、チャールズ・ダーウィン、スヴェン・ヘディン、アムンゼン、レヴィ・ストロースなどの探検家や野外科学者に憧れ、大学に入りました。しかし、1968年以降の大学闘争では、「探検する側の論理」はあっても、「探検される側の論理」は分かっていたのか。そのような探検や近代科学とは何であったか。そんな問いかけや議論がな

され、私の探検や科学に対する価値観はガラガラと崩れていきました。そして気がつけば、私は院生中心であった「地球物理共闘会議」なるグループのただ一人の学部学生となっていました。しかし、このような探検や科学に対する「根源的な問いかけ」は、ほとんど何も答えが出ないまま、私たちは元の日常に次第に埋もれていきました。

あれから 50 年、今、地球の有限性と地球環境の危機が現実性を持ってきた中で、人と自然のあり方、科学と社会のあり方が改めて問われています。地球研でも Future Earth のような国内外のコミュニティでも、学際から超学際へどうすべきか、多くの仲間が真剣に議論しています。「連帯を求めて孤立を恐れず」(注 2)ではないが、これからもシコシコとやっていくしかないのかな。歴博からの帰途、京成特急の中で、館長の久留島さんからいただいた分厚い展示資料を眺めながら、そんなことを考えていました。

<五十年振り返る身に秋の風> 哲風

(注 1) : このチリ・パタゴニアの記録は、岩波書店の雑誌「科学」に 15 回にわたって「チリ・パタゴニア ーある学生探検の記録ー」として掲載されています。

ご関心のある方は、私の HP からダウンロードできます。(業績リスト:IV 科学エッセイ他 No.51 ~No.65)

<http://www.chikyu.ac.jp/yasunari/yasunari.bak/list/essaysothers.html>

(注 2) : もとは詩人谷川雁のことば。1969 年 1 月、東大安田講堂に立てこもった学生が壁の落書きで書いていたということから、全共闘の学生のあいだで流行ったことばであった。